

「^{たちやま}多知夜麻」に降りおける雪

晴れた日には、高台にある伏木高校から富山湾とともに立山連峰の風景が見えます。この絶景を見ることで、心に栄養を補給できるのが、本校の魅力の一つではないでしょうか。

立山のことがはじめて書かれている文献は、「万葉集」なのです。天平 18 年（746 年）、弱冠 29 歳の若さで国守（現在の県知事）として越中へ赴任してきた大伴家持は、雄大な立山の景観に驚いたようで、翌年の 4 月 27 日に、「立山ノ賦」と題した長歌をつくりました。長歌のあとには、反歌といって短い歌を 1、2 首そえるのが、当時のならわしでした。その年の 5 月、奈良の都へ一旦戻ったときに、立山の素晴らしさを歌で自慢したのでしょう。「万葉集」巻 17 には、先の長歌と反歌 2 首が収められていて、その反歌のひとつに、次の一首があります。

^{たちやま}立山に降り置ける雪を^{とこなつ}常夏に

見れども飽かず^{かむ}神からならし

（原文 万葉仮名）

多知夜麻尔 布里於家流由伎乎

登己奈都尔 見礼等母安可受 加武賀良奈良之

（読み下し文）

立山に降り置いている雪は、夏のいま見ても見あきることがない。

神の山だからに違いない。（高岡市万葉歴史館編『越中万葉百科』（2007 年）より）

大伴家持は、重要な情報を後世に残してくれました。現在は立山を「タテヤマ」と呼んでいます。奈良時代には「タチヤマ」と呼んでいた、それが「万葉集」から分かるのです。

では、いつ頃、「タチヤマ」から「タテヤマ」へ呼び名が変わったのでしょうか？はつきりとは分かりませんが、富山県立図書館長をつとめられた廣瀬誠先生（故人）が「室町時代の

^{ぎょうえ}堯恵という僧侶が書いた「北国紀行」「善光寺紀行」などの文章に、タテヤマとはつきりと書かれている。おそらく室町時代にタテヤマと呼ぶようになったのではないかと推定しておられます。

さて、立山は「タテヤマ」と呼び名が変わりましたが、あえて今でも「タチヤマ」と歌うの

が、伏木高校の校歌です。はじまりが「青雲布ける^{たちやま}立山に 不滅の^{さとし}啓示仰ぎみて」。本校の校歌が、あえて「タチヤマ」と歌う理由はもうわかりますね？ 作詞は中山輝氏、作曲は古関

^{ゆうじ}裕而氏（甲子園ソング「栄冠は君に輝く」の作曲者）です。私は若いとき、高校野球の顧問として多くの校歌を球場で歌い、あるいは聞いてきましたが、いまでも伏木高校の校歌が一番好きです。お世辞抜きで、名校歌だと思います。



校長室前廊下「万葉パビリオン」パネルより